

## 新 おおさか KEYワード 【第14回】

# 「<sup>あに</sup>豈ただに大阪市民の幸いなるかな」 大学の存在は、広く人のため社会のため

「ガクト」といっても俳優のGACKTさんではない。今年、大阪大学創立の90周年、大阪大学と統合した大阪外国語大学の創立100周年である。大阪大学総合学術博物館(阪急・石橋阪大前)の、大学創立周年記念展「街に生きる学問—学都大阪の礎・つなぎあう想い—」のタイトルにもあるように、学問の都という意味の「学都(ガクト)」だ。

大阪人には自分たちの街を、商売の街、お笑いの街、食い倒れの街として語り、「大阪に文化芸術や学術研究など似あうかいな」「ええカッコすんな、大阪に学問はいりまへん」と妙な自慢をする人もいる。しかし、町人が開いた懐徳堂や緒方洪庵の適塾があるなど、江戸時代から大阪は学問の都である。諸藩は独立した小国家とも見なせるので、広島藩の頼春水(江戸時代の儒学者)や中津藩の福沢諭吉などは、大坂へ留学したわけである。

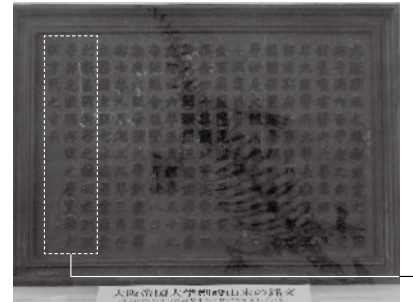
その歴史を思い出すためにも、「水都」や「商都」という呼び方と並べ、「学都」という言葉でわが街・大阪を呼ぶことにした。

大阪で近代的な高等教育をおこなった早期の学校が、本町通りに記念碑が建つ「大阪<sup>せいみ</sup>舎密局」である。“舎密”は科学を意味するケミストリーに由来し、明治2(1869)年、オランダ人の教師クーンラート・ハラタマ(1831~1888)を教頭に開校された。しかし、第三高等中学校が開校されて、明治22(1889)年、学校は京都に移り、京都帝国大学(現・京都大学)の源流となる。大阪は高等教育の学校を手放したのである。

大正14(1925)年、第2次市域拡張により、大阪は「大大阪」と呼ばれ、東京よりも巨大な都市となるが、経済、産業、文化の発展には、大阪になかった総合大学の開校が必至であった。大阪医科大学長の楠本長三郎(1871~1946)や政財界の関係者の尽力で、昭和6(1931)年、大阪帝国大学(現・大阪大学)が開校する。大阪城天守閣が市民の寄付で再建された年である。

これに先立つ大正10(1921)年、「大阪に国際人を育てる学校を」の想いから、林汽船社長で篤志家の林蝶子(1873~1945)が私財を寄付して大阪外国語学校が設立されている。司馬遼太郎(1923~1996)の母校である。昭和24(1949)年に全国でも二校しかない国立の外国語大学となり、現在は統合されて大阪大学外国語学部となった。

展示会の展示資料をひとつ紹介すると、中之島4丁目(現在の大阪市立科学館の位置)に大阪帝国大学理学部が開設されたとき、玄関ホールにはめ込まれた銘板がある。



大阪帝国大学創設由来の銘文 ※銘板の様子は反対側にあるマチカネワニの標本が写りこんでいる

原文は漢文だが、内容をダイジェストすると、「関西之雄都」である大阪は産業が盛んながら学府の制度が整えられていない。そこで帝国議会で議決し、大阪帝国大学を開設した。「立国之本」は産業にあり、産業が盛んになるには科学の研究や発展が必要だ。理学部の開設は「豈ただに大阪市民の幸いなるかな(豈特大阪市民之幸哉)」、つまり大阪市民の幸いのみならず国全体の慶事だ、とする宣言で結ばれている。

「大大阪時代」の発展は、こうした高等教育機関の整備にも支えられていた。しかし、国内に7校あった旧帝国大学(東京、京都、大阪、名古屋、北海道、東北、九州)のうち、現在、都道府県庁所在地に本部がないのは大阪大学(本部は吹田市)だけである。

“学都”としてあるべき大阪を想い、大学と市民や社会が手をたずさえることは「ええカッコ」ではない。感染症と闘いつづけるいま、切実に感じられてきた課題のひとつではなかるうか。

※大学創立周年記念展の最新情報は大阪大学総合学術博物館のホームページにてご確認ください。



銘文の最後の三行より、「豈特大阪市民之幸哉」

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展示会では「没後200年記念木村兼葎堂—なにわ 知の巨人—」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に「大大阪イメージ—増殖するマンモス/モダン都市の現象—」(創元社)など。